

第6回  日能研

# 文学コンクール

## 奨励賞

【創作文】一日二十五時間。

西京高等学校附属中学校・三年

竹内 美晴さん

### 作品に対する思い・感想

思いがけない受賞に大変驚くと同時に、とても嬉しい気持ちでいっぱいです。

常々「時間が欲しい」「世界で自分だけが動く世界を体験したい」と考えていました。この作品はその幻想ともとれる想いを書き表そうと思ってできたものです。

これを機会として、さらに自分の考えを深めていきたいと思っています。

一日二十五時間。

今年もまた夏が来た。蝉の声がうるさい。じっと聞いていると洗脳されそう。アスファルトは私に熱を当ててくる。ゆらゆらと見える陽炎。うっとうしい。やっと学校に着いたと思ったら、教室の中も息苦しいっただらない。クラス内でグループがひしめき合う。みんなで一人の機嫌とっちゃって、みっともない。でもその言葉はそのまま自分に返ってくる。

「おはよう、かおり。今さあ美華の話聞いてたところ。」  
教室に入るなり声がかかった。仕方なく輪の中に入る。グループの中心は美華。いつも美華。うんざりする。

「あ、かおり！ねえ聞いてよ、昨日私さ……。」  
無駄に明るい声で耳がキンキンする。かおりは思わず目をつむったが、幸い美華には気づかれずに済んだ。

チャイムがなって席に着いたときには、かおりの気力はもう皆無に等しかった。授業も頭に入っていない。

何で？何で授業なんか受けなくちゃいけないの？勝手に必要な勉強だけしてなりたいたいものになっちゃダメ？頭の中は不満ばかり。先生の話は全て右から左へ流れていった。

昼食の時間もかおりの憂鬱は続く。美華の机の周りに椅子

だけ持ってきて、五人で狭苦しく食べる。話すことと言えば今日の授業、昨日のテレビ、恋愛話くらい。あとは人の悪口がちよつと。毎日同じようなことを繰り返して、他の子が飽きないのが不思議だ。

「ねえ、またまり子が自慢してきたの、聞いてよ！」麻弥まやが突然言い出した。

みんなが彼女の方を向く。ああ、またか。かおりは心の中で呟いた。いつも悪口の最初は麻弥だ。その声までうざりたいよ。

「今日の漢字の小テストであいつ満点取ったからってさ、二十五点のあたしに言ってくるの。腹立つく。」

「何それ、ムカつくね。」美華も同意した。

だがかおりはそれより幼なじみの点数の低さに啞然としていた。あんたもあんたで勉強しないからじゃん…。

「ほんと、まり子にくっついてる子たちってわかんない。」麻弥にまや続いて真も言った。赤い眼鏡がいつもより攻撃的に見える。「うちも言われたよ、こんなの満点取って当たり前だよねってさ。嫌味く。」

「それ誰？」かおりが聞いた。そろそろ発言しないと反感を買う。

「由紀。あいつしかいないじゃん、そんな上から目線でしゃべるや

つ。」

「だよね、やっぱり？」真と仲のいい淳子じゅんこが相槌を打つのを聞いて、かおりはうんざりした。何てくだらない。相手の目の色ばかりうかがっているのは本当の友達なんかじゃない。そんな人、今の私には誰もいない。学校なんてめんどくさいだけ。

帰り道、さびれた公園のベンチに中年のみすぼらしい男が座っていた。髪とひげは伸ばしっぱなしで、暗い色の服もくたびれている。最近はずっといるようだから、きっとホームレスか何かだろう。かおりは特に何の感情も持たなかった。家に帰っても宿題、勉強。楽しいことなんてあったっけ？かおりの足取りは重い。

じりじり照りつける太陽はいつまでも沈みそうになかった。

夜がようやくやく訪れて、かおりはベッドに入った。

頬の上を何かが通り過ぎた気がして、かおりはそっと目を開いた。ついさっきまで鬱陶しかった虫の音が絶えている。部屋は異様な静けさに満たされていた。それが逆に気になって眠れない。かおりは不意に喉が渴いていることに気付く。ゆっくり起き上がるとベッドが軋んだ。台所に行く途中も家から何の物音もなかった。無意識に時計を仰ぎ見る。

——零時ちやうどをさした三本の針。そのまま顔を前に向けようとしたかおりは、はっと視線を時計に戻した。三本の針は、まだ零時をさしていた。  
止まっている。

明日お母さんに言わなきゃ。かおりは思いながら再び歩き出す。

水を飲んだらかえって目が冴えてとても眠れそうにない。かおりはテレビをつけることにした。この時間ならまだどの局でも放送している。……つかない。何度電源ボタンを押しても、何の反応もない。

いよいよおかしい。一週間前に買ったばかりのデジタル時計すら00:00のまま止まっている。ありえない。

そうか、これは夢なんだ。かおりは妙に納得した。時が止まった夢。あれ、じゃあ零時ちやうどに外にいた人は固まってるの？ 頭の中に小学校のとき先生から聞いた怪談が甦った。パイロットが不時着して町に戻ると、町中の時が静止しているのだ。子供は車にはねられるまきにその一瞬前のまま。老人はけつまずく瞬間。パイロットは彼らを少しずつ動かして救ってやる。そしてもう一度飛行機を発進させて戻ってきたときには、町の時間は流れていた、そんな話だった。この夢はその話が引き出したものなのかもしれ

ない。好奇心から、かおりはそっと玄関を出た。

公園にいたホームレスはベンチに座って空を見上げていたが、恐る恐る近づいてみると、固まっていた。野良猫たちも毛を逆立たまま静止していた。おもしろいくらい誰もが止まっている。風もない。しかし雑草がむしり取れたので、動かせないわけではないううだった。今、世界中で私だけが動いている！かおりは妙な高揚感を味わっていた。

すうっとした風が頬をかすめ、かおりは我に返った。同時に野良猫の怒った声。うるさい虫の音。突然戻ってきた音の数々に心臓が跳ね上がった。ホームレスがベンチに横になるのが目の端に見えた。

動き出した！かおりは慌てて家に走った。誰かに見られていないか、それだけが心配だ。音を立てないように自分の部屋に戻っていると、カチカチと時を刻む、さっきは止まっていた時計の横を過ぎた。ベッドに寝転んだときはまだ心臓が激しく脈打っていた。

その朝はいつもの朝だった。母親の声で無理やり目を覚まし、テレビのついているリビングには出勤前の父親。冷蔵庫の中の水は減っていない。ああ、やっぱりあれは夢だった。かおりは一人安心して

た。

だがその日の夜、またかおりは目を覚ました。昨日と同じ状況。外に出ても全てが静止していた。

気味が悪くなって、それから何日かの間は、虫の音が戻ってくるまで薄い布団にくるまっていた。

だが流石に五日続とかおりも吹っ切れた。これは多分神様がくれた猶予なんだ。別に怪物が出てきたこともないから、怖い夢でもない。なら楽しまない手はないじゃないか。

町内を散策した。窓からその家の主がまだ仕事をしているのが見えるとかおりは少し尊敬した。遅くまで仕事に追われるのは嫌だな、と思いつつ。道端に寝ている猫がいると、勇気を出して触ってみた。時が止まっても、手触りはいつも通りだった。剥製みたいだ、とかおりは思った。

いつ夢が終わるのか、かおりは大体の感覚でわかった。あの冷たい風が吹く前に、家に帰らなければいけない。かおりは猫から視線を外して、来た道に戻り始めた。

「かおりって最近ぼーっとしてない？」美華が言ったのは、夢が現れて一週間後のこと。「なんか、心ここにあらずってカンジ」

かおりはそう？とだけ答えた。今はあの夢だけが楽しみだ。

一度昔使っていたメトロノームで夢の時間をはかったら、テンポ六十で五十回強だった。つまり、ほぼ一時間。私だけの二十五時間目。言葉の感じがいい。人々の『時間が欲しい』という究極の夢を、のまかおりは実現しているのだ。私は特別な人間なのかも知れない…。

「それよりさ、今日の時間割きつくくない？」真がだるそうに言う。

「わかる〜」

そのとき彼女はもう既に今日やることを思案していた。他のことを考えても仕方がない。せつかく自分だけの時間があるのだから、それを活用したい。

段々歩くだけでは物足りなく思えてきた。面白いことを見ても、それを共有する友達がない。自分一人だけの世界。何だかつまらない。かおりは公園の隣にある近所のおばさんの家の窓ガラスに目をとめた。

どれだけ中が透けても、私はその中には入れない。その空間に手を伸ばすことすら許されない。なぜって、窓ガラスは外部からの接触を拒絶するものだから。外の世界に対する防壁だから。掌をガラスに当てると冷たかった。それにぞくとした瞬間、か

おりの中で声がした。

——割っちゃえ。

掌に力がこもる。

——私を拒絶するモノなんて要らない。どうして中に入ることが許されないの？割っちゃえよ、そんなもの。どうせ明日には何も起こらないんだから。

ぐっと押しそうになったそのとき、ガラスに映った自分の姿と目が合った。瞳には何も宿っていない。少女は初めて自分の内の「悪」を見た。凍りつくような感じが背筋を駆け上がり…。

「あ——」

かおりは手を引込めた。勝手に手が動くことに恐怖するように両手を体に押し付けた。脚が震える。危なかった。もう少し踏み止まるのが遅ければ、私は底なしの「悪」に沈んでいっただろう。怖かった。逃げるようにして、かおりは家に走った。街路樹が皆走り去るかおりを睨んでいるように感じた。家に帰っても、鏡やガラスは絶対見なかった。見られなかった。

あの日以来、二十五時間目が来てもかおりは散策に行かなくなった。かわりに部屋で本を読んだり、勉強をしたり、考えごにふけた。思いつきり歌ってみたこともある。とにかく外には出

たくなかった。いや、出なくてもよかった。意味もなく散策するよりも部屋の中で過ごした一時間の方が有意義だった。そうするようにはしてからは、他の二十四時間の過ごし方も変わってき  
た気がする。最近では学校がそこまで面倒ではない。

あの瞬間に私はもう一人の自分と会った、とかおりは思っている。自分の中の「悪」、それが窓ガラスに写し出されたのだ。きっと今までの心の中のどろどろは、あの自分から湧き出ていたものだろう。「悪」に支配されていたと思うと、少し悔しい気もする。深く、長い溜め息が時を止められた世界に虚しく響いた。

夢を見始めてから今日で二十五日目だ。もうあの一時間だけ数えても一日分の時間になってしまった。かおりは足元の落ち葉に目を落とした。八月の地獄のような蒸し暑さはいつの間になくなっていった。蝉もその短い青春を終えて、ただ風が木の葉を揺らす音のみ。秋の気配はそっと世界を包んでいる。

自分だけしかない世界。最初、それは神様のくれたご褒美だと思った。つまらないことしかないこの日々から脱出できる時間。しかし今はそうは思えない。一人は、寂しい。気持ち共有できる人が誰もいないことが辛い。誰でもいいから、話し相手が無性にほしくなるのだ。かおりには動かない世界は虚しくなっていた。

それに比べて、この風景の何と素晴らしいこと！小さな音が重なり合って、それ自体が一つの音楽にすら聞こえる。人がいて、会話があって、全てが動いている。かおりは大きく深呼吸した。

「おーい、かおりい！おはよー！」

後ろから麻弥の明るい声がかかった。こうして聞いてみると、全然うざったい声じゃない。むしろ私まで明るくなれそう。本当の友達がいなかったら、つくればいい。何で今まで努力しなかったんだろう。

薄々気付いてはいたのだが、かおりは今までのものの見方が歪んでいたことを知った。考え方を変えれば、こんなに世界は変わる。こんなに自分は変えられる。

「麻弥、おはよう！」

「あれ？久しぶりにかおりの笑ったトコ見たなあ。何があったのか知らないけど、よかったじゃん！」麻弥が背中を力強く叩いたので、かおりは前のめりになった。

「わっ！こけるかと思った。」

「あは、そう？ごめんごめん。」

二人は肩を並べて歩き出した。まばらに落ちた枯れ葉を踏む足音が二つ。軽快な音を響かせて遠ざかっていく。雲一つない秋空が、かおりの心をそのまま映していた。

笑いながら通り過ぎた公園とその隣の近所のおばさんの家。かおりは気付かなかった。

——公園の雑草は不自然におしりとられ、窓ガラスには人の手形がくっきり浮かび上がっていた。

冷たい風を感じて目を覚ますと、時計が〇〇〇〇で止まっていた。音が聞こえない。舌打ちをし、煙草に火を点けてベランダから下を見ると、町の歩行者も、車も、微動だにしていなかった。高層ビルにかけられた電光掲示板は『この先渋滞…』で止まっている。

これは夢なのか？頬をつねると痛い。…そうか、これは人生に絶望した俺のために誰かが用意した世界なんだ。なら好きなことをしていいんだよな——？

二十五歳のフリーター、久保辰巳はにやりと笑って自分の狭いマンションの一室を出た。